

第3回京都市総合計画審議会における主な意見

<骨子案全体についての御意見>

榑田委員

- 全体的に文体が難解なので、市民が読みやすい文章にすべきである。

堀場委員

- 読まれるのは口語体で分かりやすく書かれたもの。一般市民に対しては口語体の分かりやすいものにするのが良い。

杉田委員

- 市民の概念を、もう少し深く考えてみたい。
- 最近、二拠点、もしくは多拠点という形で京都に関わりを持ち始める方や、海外から毎年京都を訪れる方も多い。従来の考え方では、住民票があり、市民権があり、投票権があるというところで市民が定義されるのかもしれないが、ライフスタイルが多様化した今、様々な形での市民の在り方、京都への関わり方があると思う。

鈴鹿委員

- 未来共創チーム会議委員の意見にもあったのだが、京都の文化や言葉は、実際より敷居が高いように感じやすく、敷居が高いと感じてしまうと「もういいか」となってしまう。現時点ではあらずじなので多少難しい表現なのかもしれないが、市民に浸透させるためには読み進めたいと思うような文体を心がけて頂くと良い。

藤野委員

- 骨子案からは、学問の世界が男性中心に発達してきたのだということを強く感じた。他の委員の指摘にもあったとおり、子ども、あるいはケアの観点が出ていところからもそれを意識させられる。
- 人は生まれてから死ぬまで、誰のケアを必要とし、一人では絶対に生きていけない。死ぬ時も同じで、人間は絶えず誰かにケアを受けたり、ケアを授けたりする関係性にある。それは本当に基本的なことだと思うが、現在の骨子案からはそこがあまり見えてこない。
- 西洋二元論とよくいうが、学問の世界のジェンダーは一元論である。男性しかいないから女性や子ども、ケアという要素が不可視化されてきた。SDGsの概念の意義は、そうしたことを可視化していくところにあると思うので、一概に否定できないのではないかな。
- 女性をはじめ、様々な人が読むものだと考えたとき、高尚な世界だけではなく、もっと日常に落とし込んだ、視点も入れられたら良い。

濱崎委員

- これまでの京都について成り立ちを語る中で、そうした非二元論的な視座があるのだということが、ビジョン全体の中で納得できると大変良い。「だから京都なのだ」というようなことに、全体が

ぐるっとつながっていくような形にできると良い。

プラー委員

- 外国籍で長く日本に住んでいる人は、「国民」や「市民」という言葉に、自分が入れているのか、入れられていないのかが気になっている。「国民」ということになると、少し違和感があるが、「市民」という言葉になると、自分も含まれていると感じる。
- 分かりやすい日本語で書いていただければと思う。読む人の言語に合わせて多言語化することで、もっと分かりやすくなる。自分の理解できる言葉で読めることは、とても重要だ。

貫名委員

- 洛中の中心部に行くほど、非常に京都市的であるという語られ方をしがちだが、洛外といわれる地域に、様々な京都らしさのエッセンスがあるのではないかと思う。京都像をどこから見るかによって、全体の見え方が変わってくるのではないか。

原委員

- 万人が読むものであるため、お年寄りの方、働いている方、学生の方、誰もが読みやすく内容が理解できる文章であってほしい。

曾我副会長

- 未来があって、その未来に到達するために、現在からどうやっていったらいいのかという点が、骨子案では見えにくい。こうなるだろうという予想の話と、こうしようという目標の話が、混ざった形で書かれているからである。
- 過去から現在、未来と書かれると、何となく自然とこのように流れていって目標に到達していくような気がするが、本当にそのようなことはあるだろうか。目標と予想を分けて、かつ、現在を認識した上で、その差をどうやって埋めるのかということ考えたほうが良いのではないか。

安保副会長

- 京都はすごく厳しく、きちんとした面もあるが、奥深い、寛容な深さがあって、それで受け入れてくれているところがあり、安心していられるところもある。そのため、長期ビジョンは、全ての方が自分のことをいわれていて、自分の理想にできるのだというような、少し柔らかく、それから寛容なものであってほしい。

<個別記載についての御意見>

榊田委員

- 第四章第三節、第四節のまとめ方が重要である。
- どれだけデジタル化が進捗しようとも、人間中心であり続けること、すなわち人と人との関係性をいかに充実させていくのかということ多様性を伴うような社会構造の変化。つまり、多様な人々が、居心地がいいと思えるようなまちをどうやってつくっていくのかということ、この2点を盛り込んだうえで、自分たちのまちは自分たちが一番責任を追っているのだという自治の概念をもう少し強

く盛り込んでいただきたい。

- ステークホルダーとしての行政、市民、そしてまちの個性になる企業。それぞれ立場が違う構成員がきちんと連携する、距離を縮めるという関係性が、長期ビジョンの中に現れると良い。

堀場委員

- サステナビリティやSDGsなどを今さら外国から言われたくない。京都、日本は、そうしたことを大上段に振りかぶらないで、自然にやってきている。
- 「既にやっている」「京都を見ていただきたい」というアプローチが大切で、そこには誇りがあると思う。海外の文化を否定、或いは敵対する趣旨ではない。よく理解することが大切で、盲目的になるべきではないということである。
- 信念を持つ、動じない、文化的自信を持っているということが基軸となっていることが重要であり、それがこの骨子案では論理的に展開されていると思う。考えのベースに京都人としての誇りがあることは、最も重要なことだ。

鈴鹿委員

- 「安心」や「安全」という要素が希薄である。世界情勢などが変化してきている中で、「京都にはつながりがあるから、安心」ということは一つのキーワードになるのではないだろうか。
- 第2回審議会のグループ討議でも話題になっていたが、ネットのつながりの中で交流が済んでしまうようになって、やはり京都は顔と顔を合わせる地元の関わりが強く、町内会なども残っている。自治の意識も根付いており、他都市に比べてそれによる安心というものがあるのではないか。
- 「子ども」についての要素も薄いと感じた。
- 文化の面については、過去の歴史が新たな未来につながっていくという観点は興味深い。現行基本構想には、キーワードとして「市民の日常生活に深く浸透している文化」という言葉が用いられている。そうしたものがあからこそ、市民が持つ独特の美的感覚や暮らしの知恵などがある。先ほどの意見にもあった「京都の誇り」は、個々が属している文化に誇りを持つことにもつながってくると思うので、それが日常にあることを、分かりやすい形で提示されたら良い。

牧委員

- 京都は天災には見舞われずにきたが、戦乱によって何度も焼かれ、立ち直ってきた。そこが京都の良いところだろう。
- 防災の観点から述べると、被害を完全に防ぐことはできないので、被災後どう立ち直っていくのが重要であり、レジリエンスが高いことが京都の強みである。
- この文章では「私」が主語になるので、例えば、災害から復興するにしても、安全・安心を確保するにしても、誰かがやってくれるのではなくて、「私」が何かしなければならぬということ。最初は少し厳しいスタンスだと感じたが、災害復興にせよ、安心・安全なまちづくりにせよ、一人一人が強くなり、きちんとやらなければ実現は難しい。安全・安心という観点では、例えば自治会に入っていなかったら助けてもらえないという捉え方をすれば違和感があったが、よく考えると、無責任に社会はこうしなければいけないなどと言ってしまわないことは、かえって妥当なのではないかと思直した。

- 第四章第二節の人間性を回復できるというところには、一人きりで頑張るだけではなく、周りの助けも受けながら回復できるのだというようなニュアンスがもう少しあっても良いのではないかと。
- 個人主義的傾向に抗うということと、「私」を主語とすることのバランスをとり、どのように上手くまとめるのかという点が難しい課題である。

高屋委員

- 福祉の世界は特にそうだが、人口減少が進む中で支える側の高齢化が進行し、そうした人が一生懸命やっているのが現実なので、支え、盛り上げようと頑張っている市民の姿を、未来のビジョンに落とし込んでいただけたら有難い。

福富委員

- 第四章第四節に市民の主体性という話があるが、これはまさにそうで、歴史や過去の様々なものの積み重ねから今の暮らしがあり、これから先も、一人一人が周りのために何かをすることで次の社会が形成されていくのだとしたら、「私」という主体それぞれに責任があるということを示すことは重要だ。
- 第三章で「構造的暴力」に言及していただいていることは大変良い。暮らしづらさの背景には、社会構造の問題がある。ソーシャルワークの考え方では、社会構造自体に如何にアプローチしていくかが重要だといわれている。干渉と予防に尽力していった先、すなわち構造的なゆがみや、暴力が徐々になくなっていった先に安心があるのだと思う。
- 人口減少、高齢化の問題などは、サイズの大きい問題だが、例えば障害のある人や子どもなど、福祉の観点から見れば色々ある。個別具体的にどこまで書いていくのか検討いただきたい。
- ケアというと一般的にはケアする側が、される側に対して施すようなイメージだが、実はケアしている側が逆に頂くことも沢山ある。ケアする、されるという関係性の中に一体的な何かが起こっているのだということだ。

松井委員

- 感染症に限らず、人口減少や少子高齢化という具体的な問題は、目前に、そして急激なスピードで襲ってくる。
- 人口減少社会、少子高齢社会は確実に訪れる。そうした中、どうやって柔軟に対応していくのかということを考えながら、自分たちの責任、或いは役割を果たしていくということが重要である。
- 基本的なビジョンがあれば、自分たちが何かやらなければいけない時に、目指す方向が明確であることで、将来何か大きな問題が起きた際にも、それを見返すことによって、自らの行動の規範とすることができる。
- 例えばイギリスには、「ゆりかごから墓場まで」という、一言でどのような国なのかということが理解できるような言葉があるが、京都にも、他所とは違う何かを一言で表現できるものがあるのではないだろうか。
- 伝統文化を守っていらっしゃる京都の若い職人さんの話を聞く機会があった。その方は、伝統の技術を継承しているだけではなく、一つの製品が出来上がるまでのプロセスで、様々なもの関わりや自然との共生にも思いを巡らされていた。伝統文化の継承とは、技術だけではなく、理念や理想の継承

なのだと感じた。つまり、京都で守っていかなければならないものは、最初の議論に立ち戻るが、そういう、理念や理想ということなのかと思う次第である。

濱崎委員

- 第三章の第二節において、現行基本構想以降、京町家に関する取組が活発にあったので、そういったことの話もあれば良い。

田中委員

- 第四章「京都市のこれから」について、学びや教育が今後どのようになっていくのかということは、ぜひ盛り込んでほしいと思う。また、産業の発展や経済の部分についても、書かれていることが少ないと感じたため、その部分も御検討いただきたい。
- 第四章第三節の冒頭で、「デジタル化が人類社会における個人主義的傾向を強化していく中で～」という記載に対し、デジタル化が個人主義的傾向を強化していると言い切るのは少し違うのではないか。デジタル化も一つの要因ではあるだろうが、それだけではないと思う。

阪部委員

- 西洋的な価値観を特に前面に押し出し過ぎていて、社会が分断していたりするところが、京都らしさとあまり相いれない点。そういう意味で、骨子案に記載されている「人の在り方を尊重し合いながら」のような表現は、すごく優しくて良い。
- 可視化という意味では、もう少し踏み込んだ表現も何らか必要かと思っており、その辺りのバランスが難しい。

貫名委員

- （第四章）各節のイントロというか、背景情報の部分で、果たしてそれが事実であるかが気になっている。エピソードベースで本当にそれが事実なのか、あるいは証拠があるのかという点を、少しだけ気にしたほうが良い。

原委員

- やはりコミュニティというか、いろいろな固まりが大事だと思う。

曾我副会長

- デジタル化などについて、あまりネガティブなことばかりを書くよりは、そういうものが経済の中心になってくることを生かしつつ、それにどのように対応するのかを記載することが必要。
- 一般の市民にとって大事なのは、福祉と経済と教育だと思う。そこに対する将来像として、予想がこのようにあって、それに対して、このように対応するというを書かなければいけない。
- デジタル化が個人主義的傾向を強くしているというよりは、個別化された情報が取られていく時代。個別化された情報が取られていく時代に対して、どのように対応するのかという問題は大きい。
- 政治に関する記載が全くない。政治、行政の側が抱えている問題として特に大きいと思うのは、今も既に現れている分断化や分業化が、今後を含めて、さらに強まることだ。京都において、そういう

ものと無縁であり続けられるなどということはない。人々がどういう形で公共的なものに対して関わっていくのか、その時に分業化してしまうのか、それともまとまっていけるのかという問題について、記載があっても良い。

安保副会長

- 主体的参加。どうしても大人しかイメージできないが、子どもも、教育されるだけの受け身ではなく、子どもは子どもの生活について主体的に参加できる、まだ社会で主流ではない若い人も参加できるなど、そういう京都の多層性の記載もあってほしい。

宗田会長

- 町屋があるから京都は偉大なのではなく、今生きている人が、そこにある伝統工芸を大切に、これまでを大切にする気持ち、スタンス、哲学、理念があるから、町屋の住民もそれをつないでいこう、さらにそれを紡いでいこうという姿勢がある。それが、京都らしいということだろう。
- 25年前に策定の京都市基本構想策定当時、「国籍や民族、生まれや生い立ちに関係なく、全ての人が自分の居場所を」という議論について熱く語っていたが、今思えば、京都の地域社会は現在とは状況が異なり、まだまだ国際化していなかった。第三章の第一節の「前四半世紀における世界の動き」において、DEI（Diversity, Equity & Inclusion）という世界の潮流を挙げていただいているが、SDGsをはじめ、決して世界がDEIを言っているわけではなく、実は昔から京都の中で、多様な人々がどう共に生きるかという観点は大きな課題とされていた。内なる多様性の問題もあったから、それを踏まえたいうえで、京都はこの課題に自らどういう取組をし、どういうことを解決してきたかということも少し踏まえる必要がある。

このDEIはアメリカ、ヨーロッパではそれぞれ大変苦しんでいるテーマである。いわゆる多文化共生などと、のんびりと言っている時代ではなくなってきている。そして、世界が激動している中で、京都のような地域社会が、このDEIをどう考えるかということも大きな課題である。この25年間で、この課題についての取組が進んできたが、同時に、インバウンドが急増している現状において、インバウンドにどう対応するか、どう京都に合わせてもらうのかという議論も重要である。

- しばらく前に、クリエイティブエコノミーやクリエイティブシティという議論において、LGBTQに対して寛容になった社会が経済的に発展していくのだという説があった。京都は、ある意味で寛容な社会を何とか維持してきた部分がある。だから多様な新しい技術や産業が発展してきたという説があり、これからの都市のクリエイティビティをどう維持するかということとも密接に関係すると感じている。
- 自然とどう対峙するのか、どう関係を持つのかという大きなポイントを見直す機会が来ている。根底にある、西洋と日本という捉え方もおかしい、アフリカなどを見なさいという意見もあった。世界観自体も、東洋、西洋、日本と西洋という捉え方や自然と人間という捉え方をするのではなく、もう少し幅広く物事を捉えていくことも重要かつ現代的な視点である。25年の間に、世界観が変わるかもしれない。